

# マーケット SCOPE

## マーケットの動きを報じる 「表現力」を高めるには…

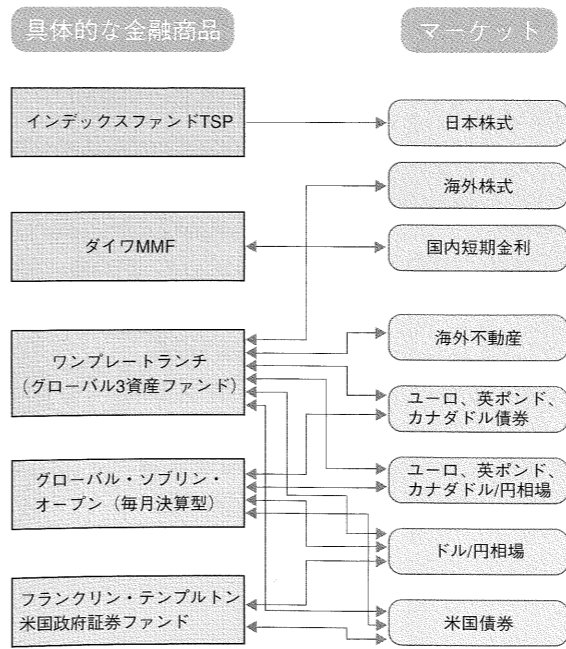
2つのテーマを意識するだけで確実にレベルアップ可能

「まだ激変しつつある」と言わねばならない。が、これは願ってもないこと。何しろ「変化あるところ」にチャンスありなのだ。これは決して株式投資に固有の格言ではなく、学習一般について言えることだ。小稿をお読みいただいている多くの方は、小説を読むときのように「消費としての読書」を行なっておられるのではないと思う。ここで知り得たことを仕事の現場で活かすという明確な目的があるのでないか。そしてここでいう「仕事に活かす」は多くの場合、「より有意義なコミュニケーション」を他者との間で開始し、

「質」は一昔前のまま!?」  
閑話休題。多くの金融機関で国債の窓販がスタートして20年近く、投資信託の窓販開始以来10年近くを経ていなが

なうことができるように」である。もちろん「他者」とは、店頭を訪れる「既存顧客」であり、あるいは訪問先における「これから顧客になる可能性を持つ他者」であると思う。では、「より良い（レベルの高い）コミュニケーションを持つ」ためにはどうすればいいか。「（自らが）より優れた表現手段を持つ」ことから始めるに限る。

図表1 なぜ「マーケットの学習が不可欠」なのか



ら、いまだに顧客とのコミュニケーションの質が、それ以前の内預金一辺倒の時代からあまり変わっていないように思う。

図表1は、銀行などが扱う頻度が高い投資信託を並べてみたものだ。これらのファンドの基準価額（つまりは運用成績）は何によって決まるか。無論、右側に配した各種のマーケットの動きだ。非常に乱暴に言うと、これらのマーケットの影響が7〜8割、ファンドマネジャーの能力が及ぶ範囲はおそらく2〜3割程度だろう。

であれば、これらのファンドを買う（あるいは買おうと

変化あるところに  
チャンスあり

新年度である。この連載もちよつぱり装いを新たにしたいところだが、この新装開店直前に、数年に一度あるかないか、というくらい経済、金融情勢が激変した。世界的規模での株価急落と急速な円高の進行だ。いや、3月8日現在では

「まだ激変しつつある」と言わねばならない。が、これは願ってもないこと。何しろ「変化あるところ」にチャンスありなのだ。これは決して株式投資に固有の格言ではなく、学習一般について言えることだ。小稿をお読みいただいている多くの方は、小説を読むときのように「消費としての読書」を行なっておられるのではないと思う。ここで知り得たことを仕事の現場で活かすという明確な目的があるのでないか。そしてここでいう「仕事に活かす」は多くの場合、「より有意義なコミュニケーション」を他者との間で開始し、

する）顧客は何に注目しているか。言うまでもない。これらのファンドの収益を規定す

るマーケットの動きだ。そうであれば、この「マーケットの動き」についての表現能力

をどの程度持っているかが問われるのは当然だ。しかし、残念ながらこの点について銀行窓口等での対応は、まだまだブリマチュア（未熟）であると云わねばならない。

「定性表現」から  
「定量表現」に進める

ここでは2つのテーマを取り上げておく。

1つは図表2の左半分に記載した「具体的にはどの程度」という情報を付加することだ。つまり、マーケットの動きを「下がった」とか「上昇した」という動詞だけで表現することから一歩進んで、「どの程度」を「数量的に示す」のだ。いわば「定性表現」から「定量表現」へ一歩進めるのだ。「日本株は下がった」から一歩進めて、「1万8200円から1万6700円へ」と表現するのである。

2つ目には、図表2の右半分に示したように、「その因果関係を示す」のだ。例えば、「円相場が上がった」のであれば、「円キャリー取引の巻き戻し、解消が部分的に進んだことが円高の原因」と、その原因に言及するのだ。もちろん

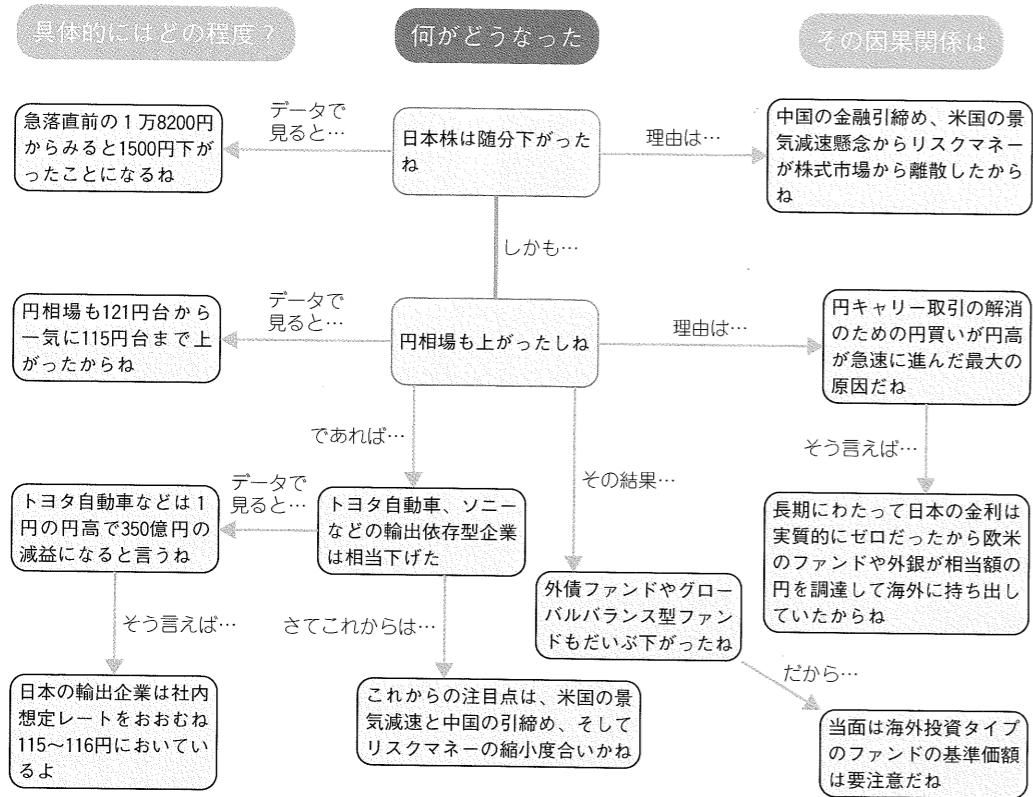
ん、「円キャリー取引」と表現する際には、日本の金利があまりにも低かったため、主に欧米の機関投資家、銀行、ヘッジファンドなどが超低金利の円を調達、それを欧米に持ち出して株、債券、商品先物などを買うという動きが広範囲に見られた、という現状認識がなければならぬ。

簡単に言えば、「数字で示すことのできる動きは努めて数字データを具体的に示す」「その現象のよってくる原因に言及する」の2つを意識するだけで、あなたの表現は確実にレベルアップする。

さて、ではそのためには具体的にどのような学習が有効なのか。

次号は、名実ともに新年度入り（4月20日発売）。これから数回〜6回程度に分けて、マーケットを見るための基本をできるだけ現実的に即しながら（教科書的記述に墮さないように）お話しすることにしよう。

図表2 表現力をアップさせるための2つの基本スキル（経済・マーケット一般編）



例え、最近のマーケットの変容について表現するとして（以下図表2参照）。単純に言う「日本株は随分下がった」とか「円相場急速に上がりましたね」などの表現が最も一般的であろう。では、この表現をさらに豊かにするためにどうすればいいか。つまり、この手のマーケットの動きを報じる表現の質を高めるためにはどうすればいいか。

「定性表現」から「定量表現」に進める  
ここでは2つのテーマを取り上げておく。  
1つは図表2の左半分に記載した「具体的にはどの程度」という情報を付加することだ。つまり、マーケットの動きを「下がった」とか「上昇した」という動詞だけで表現することから一歩進んで、「どの程度」を「数量的に示す」のだ。いわば「定性表現」から「定量表現」へ一歩進めるのだ。「日本株は下がった」から一歩進めて、「1万8200円から1万6700円へ」と表現するのである。  
2つ目には、図表2の右半分に示したように、「その因果関係を示す」のだ。例えば、「円相場が上がった」のであれば、「円キャリー取引の巻き戻し、解消が部分的に進んだことが円高の原因」と、その原因に言及するのだ。もちろん

ん、「円キャリー取引」と表現する際には、日本の金利があまりにも低かったため、主に欧米の機関投資家、銀行、ヘッジファンドなどが超低金利の円を調達、それを欧米に持ち出して株、債券、商品先物などを買うという動きが広範囲に見られた、という現状認識がなければならぬ。  
簡単に言えば、「数字で示すことのできる動きは努めて数字データを具体的に示す」「その現象のよってくる原因に言及する」の2つを意識するだけで、あなたの表現は確実にレベルアップする。  
さて、ではそのためには具体的にどのような学習が有効なのか。  
次号は、名実ともに新年度入り（4月20日発売）。これから数回〜6回程度に分けて、マーケットを見るための基本をできるだけ現実的に即しながら（教科書的記述に墮さないように）お話しすることにしよう。  
（3月8日）